共催

東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト

二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

# 「21 世紀における『孟子』像の新展開」

## 予稿集

日時：

第 1 日　2019 年 6 月 22 日（土）13：00～17：00

第 2 日　2019 年 6 月 23 日（日）10：00～15：00

会場：二松学舎大学　九段キャンパス 4 号館

6 階 4061 教室

# 「21 世紀における『孟子』像の新展開」

## 開催趣旨

戦国時代中期の思想家・孟子の思想を窺い得るテクスト『孟子』は、特に南宋の朱熹が重視して以降、人間の先天的な能力を積極的に評価したものとして思想史上一つの中心的な役割を果たしてきた。

しかし、歴史的に見ると『孟子』の評価は必ずしも一様であったわけではなく、時代や地域によって多様な捉え方をされてきたともいえる。

東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト
研究代表者
田中 正樹
二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
研究代表者
町 泉寿郎

# ―プログラム―

## 第１日　「中国古典学と孟子」

開会の挨拶　田中 正樹（研究代表者・二松学舎大学教授）　13：00～13：05
趣旨説明　　田中 正樹（同上）　13：05～13：10
１.末永 高康（広島大学教授）
「五行から四端へ－孟子による子思思想の受容と改変－」　13：10～13：40
２.南部 英彦（山口大学准教授）
「太初改暦における黄老と儒学の統一－孟子の「五百年周期説」の漢代的展開－」
13：45～14：15
３.市來 津由彦（研究分担者・二松学舎大学特別招聘教授）
「『孟子』の北宋を読み解く」　14：20～14：50
～休憩～　14：50～15：00
４.井川 義次（筑波大学教授）
「イエズス会士によるヨーロッパへの初期『孟子』紹介と翻訳の実情」　15：00～15：30
５.田尻 祐一郎（東海大学教授）
「伊藤仁斎と『孟子』」　15：35～16：05
～休憩～　16：05～16：10
総合討論　コメンテーター：野間 文史（広島大学名誉教授）　16：10～16：50

## 第２日　「近代漢学と孟子」

開会挨拶　牧角 悦子（二松学舎大学文学部長・教授）　10：00～10：05
趣旨説明　町 泉寿郎（二松学舎大学 SRF 研究代表者・教授）　10：05～10：10
１.桐原 健真（金城学院大学教授）
「孟子の幕末」　10：10～10：40
２.田中 正樹（二松学舎大学 SRF 事業推進担当者・教授）
「山田方谷・三島中洲にみる近代の陽明学と孟子」　10：45～11：15
３.エディ・デュフルモン（ボルドー・モンテーニュ大学准教授）
「孟子、カントとアレクサンダー・ベイン、中江兆民の自由哲学について」11：20～11：50
～休憩～　11：50～13：00
４.中島 隆博（東京大学教授）
「フランスシノロジーが読む孟子」　13：00～13：30
５.木村 淳（大妻女子大学非常勤講師）
「明治・大正期の『孟子』教材」　13：35～14：05
総合討論　コメンテーター：ジェレミー・ウッド（SRF 研究員）　14：10～14：50

# 第１日
# 「中国古典学と孟子」

開会の挨拶　田中　正樹　　（研究代表者・二松学舎大学教授）
趣旨説明　　田中　正樹　　（同上）
１．末永　高康　　（広島大学教授）
「五行から四端へ－孟子による子思思想の受容と改変－」
２．南部　英彦　　（山口大学准教授）
「太初改暦における黄老と儒学の統一
－孟子の「五百年周期説」の漢代的展開－」
３．市來　津由彦　　（研究分担者・二松学舎大学特別招聘教授）
「『孟子』の北宋を読み解く」
～休憩～
４.井川　義次　　（筑波大学教授）
「イエズス会士による
ヨーロッパへの初期『孟子』紹介と翻訳の実情」
５．田尻　祐一郎　　（東海大学教授）
「伊藤仁斎と『孟子』」
～休憩～
総合討論　コメンテーター：野間　文史　　（広島大学名誉教授）

| 発表タイトル | 五行から四端へ―孟子による子思思想の受容と改変― |
|---|---|
| 発表者氏名 | 末永 高康 |
| 所属・職位 | 広島大学教授 |

前世紀末より、孟子思想研究を取り巻く環境は大きく変化している。孟子の当時に書写されたと考えられるいくつもの写本が発見され、孟子が置かれていた思想状況に関する情報が飛躍的に増加したからである。なかでも郭店楚簡の『五行』と『性自命出』の出現は孟子思想研究に対して決定的な影響を与えている。郭店楚簡『五行』は、馬王堆帛書『五行』――「経」とそれを逐語的に解説した「説」からなる――の「経」の部分に相当するが、『荀子』非十二子篇で「子思これを唱え、孟子これに和す」と言われる子思の「五行」の学説を伝えるものである。『性自命出』は、その作者は不明であるものの、孟子に先立つ性説のひとつの姿を伝える貴重な資料である。

『性自命出』では「喜怒哀悲の気」が「性」の構成要素とされ、この「気」(「性」) が「物」と感応することにより、喜怒等の「情」が発すると考えられている。そこでは感情のみならず「好悪」「善不善」の判断も同様の図式で処理されており、「性即気」と称し得るような思考が示されている。この思考において＜心＞は、「性」(「気」) と「物（勢)」の間に介在し、両者の感応に影響を与えるレンズのような存在として理解されることになる。「性」と「物」とのあるべき感応が阻害されるのは、この＜心＞のレンズが濁って歪んでいるからである。「教」「習」を通じてこの＜心＞を透明で歪みのない状態へと持っていくのがそこで考えられている修養の形である。

『五行』の「経」は「仁」「義」「礼」「智」「聖」を「五行」とし、それぞれを「内に形（あら）われたる」「徳の行」と、「内に形われざる」単なる「行」とに二分し、前者を「天道」の「徳」、後者を「人道」の「善」に結び付ける。その上で、「君子の道」を「聞いて知る」ちからである「聖」、「賢人」を「見て知る」ちからである「智」を、「思」の努力を通じて覚醒させることにより、「人道」の「善」から「天道」の「徳」へと駆け上る修養の形を考える。

この『五行』の「経」には、孟子の四端説の先蹤というべき説も示されているが、「仁」「義」「礼」の端緒とされる「恋」「直」「遠」を、『五行』の「説」では、それぞれ「仁気」「義気」「礼気」に置き換えて説明している。このことは『五行』の「説」が『性自命出』と同様の「性即気」の思考に立つものであることを示すとともに、『五行』の「経」の思想のひとつの展開の方向を示している。

孟子が子思の『五行』の影響を受けていることは、そのタームを『孟子』が引き継いでいることから明らかである。にもかかわらず、孟子は『五行』の「説」と異なり、「仁」「義」

「礼」「智」の端緒を「気」によって語ることをしない。「惻隠の心」「羞悪の心」「辞譲の心」「是非の心」にその端緒を見出し、これをあくまで「心」によって語るのである。この「気」から「心」への転換は孟子の「不動心」の体験と不可分であると考えられるが、「不動心」の体験を通じて、「正しさ」を知る「心」を発見した孟子は、『五行』の図式や、「性即気」の思考を破棄していく。このことは、子思から孟子への思想の展開が、連続的なものではなく、そこには大きな断絶があったことを示している。

本発表においては、この断絶の姿を描き出すとともに、そのことの持つ思想史的意義について考察を加えていきたい。

| | |
|---|---|
| 発表タイトル | 太初改暦における黄老と儒学の統一<br>―孟子の「五百年周期説」の漢代的展開― |
| 発表者氏名 | 南部 英彦 |
| 所属・職位 | 山口大学准教授 |

**一、はじめに**

前漢武帝の太初元年に、漢を土徳とし、正月を歳首とする「太初改暦」が行われた。藪内清氏は、太初改暦の背景には「受命改制」という指導原理があったとし、その暦法の詳細を論ずる。これを承けて、川原秀城氏が、太初暦の特徴の一つとして〈受命改制の指導理念に三正説と五行説が混淆し、理論上矛盾を残す点〉を挙げるのには疑問がある。すなわち、川原氏は『漢書』武帝紀に「色は黄を上び、数は五を用ふ」とあるのは、改制の詔（『史記』暦書）によれば五徳終始説によると認められるが、改制の論理として三正説を採用した以上、漢の正色は「黄」ではなく「黒」と定めるべきであったとする。しかし、改暦の詔が黄帝が五行を立てたとすること、黄帝（土徳）から秦（水徳）への五徳の循環を説く秦代の説（同・封禅書）を参考にすると、漢を黄帝の土徳を嗣ぐ王朝と位置づけることに改暦の重点があったために漢の正色を「黄」としたと推測される。この点をふまえ、方士・儒生・太史令の司馬遷が改暦に参画した事実に注目しながら、改暦における五行説・三正説の両立の在り方とその意味を、改めて考察する必要があると思われるのである。そこで本発表では、まず、『漢書』律暦志や『史記』封禅書の資料をもとに、太初改暦において黄帝と漢との関係がどのように考えられたかを明らかにする。ついで、『史記』天官書等に現れた司馬遷の天人論を参照し、太初改暦において五行説・三正説双方の論理がいかに両立し得たかを考察することで、太初改暦に込められた漢の思想的立場を明らかにする。最後に、太初改暦において五行説と三正説とを両立させる根拠として機能したと思われる、司馬遷の〈孔子が「三五の法」を述べた〉という見方の成立過程を、孟子の「五百年周期説」の漢代への展開という観点から捉えることを試みる。

**二、太初改暦における黄帝と漢**

まず、太初改暦における黄帝と漢との関係を捉えていく。『漢書』律暦志上によると、太初改暦とは、黄帝が作った一元三統四六一七年の周期をもつ暦数が一周して、元封七年十一月に、もとの甲子朔旦冬至に復帰し、暦数の新たな周期が開始されるという考えのもと、それまで施行されてきた顓頊暦（四分暦）を廃めて、漢の新たな暦（八十一分律暦）を作成したものである。さらに方士・公孫卿の言葉（『史記』封禅書）を参考にすると、太初改暦には、黄帝による宝鼎の獲得、封禅の挙行と登仙、一元三統四六一七年の暦数の策定という三段階及びその土徳を、漢の武帝自身が嗣ぐことで自身の不死登仙を目指すという意

義があったと捉えられる。

**三、太初改暦における五徳終始説と三正説の両立**

次に、太初改暦において、五徳終始説と三正説がどのように両立し得ていたのかを、司馬遷『史記』の記載をもとに考えていく。『史記』天官書は、天運には五百年周期の大変革があり、その三倍の一紀一五〇〇年、三紀四五〇〇年で数理は完備するという。また「天官書」は、帝王たる聖人は、天の日月・五星・列宿と地の陰陽・五行・州域とを統御する立場にあるという。帝王は、「三五」の時運を把握して国家統治を行うことで、天地の統御が完成するとするのだろう。「天官書」が記す、こうした天人相関の在り方を鑑みると、国を治める者が把握すべき「三五」とは、三十年・五百年という暦運の周期のみならず、天地人の三統と水火金木土の五行を指すといえる。この「三五」の理法は、「天官書」「封禅書」「孔子世家」では、孔子及び六藝と関連づけられている。「孔子世家」は、〈孔子が「三五の法」を述べた〉という。孔子が撥乱反正の儀法として後世に示した「六藝の統紀」（太史公自序）とは、易姓革命の原理としての「三五の法」を指すと考えられる。この「三五の法」と関わり、「孔子世家」は、孔子が三統説を述べたとし、「暦書」は三正説を、「高祖本紀」の賛は忠敬文説を載せる。忠敬文説は、夏殷周に忠敬文の性質を当て、かつ秦を「周の文の敝」と位置づけるので、漢は夏の忠を嗣ぐことになる。漢は、忠敬文説を媒介として、三正説としては夏を嗣ぐのである。従って太初改暦では、方士の五徳終始説と儒者の三正説とが両立し得たことになる。ここで、〈孔子が「三五の法」を述べた〉という司馬遷の見方は、五行説と三正説を両立させる根拠として機能したと考えられる。つまり太初改暦は、黄帝が定めた四六一七年の暦数とその土徳を、孔子が述べた「三五の法」（五行説・三正説）に従って漢が嗣ぐという考えによって、黄老と儒学を統一し、これを漢の思想的立場として示したと捉えられる。

**四、〈孔子が「三五の法」を述べた〉という司馬遷の見方の成立過程**

最後に、太初改暦において五行説・三正説を両立させる根拠として機能したと思われる〈孔子が「三五の法」を述べた〉という司馬遷の見方の成立過程を考える。『史記』天官書の、五百年に一度大変革が起こるという考えの濫觴は、先学が指摘する通り、『孟子』尽心下及び公孫丑下の「五百年周期説」にある。これは、滕文公下篇で孔子の春秋制作を王者の所業とする、孔子素王説と密接な関係にある。一方万章上篇では、孔子の言葉により、堯舜の禅譲も、夏殷周の王位の世襲も、同じく天意だとする。また梁恵王下篇では、湯・武による桀・紂の放伐を是認する。『孟子』は、王朝の交代は天意によるとして、その暦運に五百年に一度聖人が出現するという周期性の存在を認めるのである。子思・孟子学派の著作とされる「帛書五行篇」では、仁義礼知聖の五行が和することを天道と呼び、君子は慎独により、この五者を統一するという。この「帛書五行篇」の所説には、『孟子』の〈王朝の暦運を見通す孔子像〉と五行説とが結びつく契機が存在したといえる。戦国末

の陰陽家・騶衍は、『孟子』の暦運の思想と「帛書五行篇」の五行説をもとに、五徳終始説、大九州説及び仁義・節倹等の政治思想を展開した。騶衍の学術は、黄帝以来の天地人の相互関係を「三」「五」を用いて説明する志向をもつ。騶衍以後、『淮南子』天文篇・時則篇等において「三」「五」の重視が顕著である。この陰陽家・黄老思想の「三」「五」重視の志向を儒家も摂取した。『易』繫辞上伝は、事物は「参五」に従って変化するので、その数を錯綜させて天下の象を定めるという。『尚書大伝』略説篇は「天地人の道備はりて三五の運興る」という。この「三五」の暦運の考えに、董仲舒学派の三統説が結びつく。そこで司馬遷は、六藝を定めて「三五の法」を示した素王として孔子を位置づけた。『史記』天官書の、五百年に一度大変革が起こるとする暦運の説は、彼がいう孔子の「三五の法」の一部と捉えられる。司馬遷は、『孟子』の五百年周期説と〈王朝の暦運を見通す孔子像〉を基盤にし、「三五」の暦運を説く漢代の黄老・儒学の在り方を鑑みて〈孔子が「六藝の統紀」として「三五の法」を述べた〉という見方を示したと考えられる。

| 発表タイトル | 『孟子』の北宋を読み解く |
|---|---|
| 発表者氏名 | 市來 津由彦 |
| 所属・職位 | 二松学舎大学特別招聘教授 |

１　孟子「経」化への道
２　王安石による孟子顕彰と諸士の反応
３　「性善」説をめぐって
４　南宋へ

『孟子』書は、内容的に多様な方向性を持つ。この書は、戦国諸子として孟子がおこなった政策献策とその基礎思想を述べた、基本的には政治思想の書である。そこには、その政治思想の柱である「王道」論や「仁義」説、王道論による社会実現の前提の人間観としての「性善」説や他の諸子の思想・人間観批判、また、戦国の「客」としての孟子の活動や、その活動を支える気概としての「浩然の気」論、「養気」説などが論じられている。

この孟子の書は、四部分類としては北宋初までは「子」部に入れられていたが、北宋代に検討対象として論議の場に浮上し、南宋後半では「経」部に入れられた。

南宋のその「経」部化は、北宋の論議を承けてのものだが、後世に向けてはその読み方に枠がつけられた。その枠を語る『四書章句集注』「孟子序説」は、もとの孟子の書からすると読解の方向性にかなりの偏りがみられる。もとよりこれは、宋代において想定される孟子の受容者の社会的あり方や読解の課題の方向が戦国時代と相当に異なり、かつ宋代におけるその課題に対応する書としてこの書が見出され読み込まれたためである。その課題も、北宋期中で推移があり、その経緯の中で課題の方向性が絞られるのに対応して読解の方向が限定されていくという経過をたどった。

すなわちその概略を述べると、政府側からする国家の政治と財政の改革である「新法」政策を北宋半ばに強力に推進した王安石が、政策推進者としてのその立場から孟子に共振し、配享など制度的に孟子を顕彰して、孟子が学術上で公的に重要な位置を占めることが惹起された。これを批判する論議も多々起きた。そして同時期に並行することとして、この宋という時代に活動する士大夫にとってふさわしい人間観（性説）が社会的にあれこれ模索され、思想主張の必然的一貫として「性善」を説く孟子の説が、この人間観論議に活用された。後者のこの側面が育って、『孟子』が朱子学の四書の学に組み込まれていく。

本発表では、近年の、宋代の孟子論の動向を多角的に検討した特に近藤正則氏の諸論を主として踏まえつつ、以上の王安石における孟子顕彰の様相と、その王安石と政治的には対抗関係におおむねあった道学派の程顥・程頤の性説論議との二件に焦点を絞って現象を追跡し、またこの両件の課題領域の相関を考えることにより、北宋から南宋初にかけての孟子読解の推移を再考することとしたい。

| 発表タイトル | イエズス会士によるヨーロッパへの初期『孟子』紹介と翻訳の実情 |
|---|---|
| 発表者氏名 | 井川　義次 |
| 所属・職位 | 筑波大学教授 |

**『孟子』情報のヨーロッパへの流伝**

『孟子』は世界哲学史において性善説、民本主義、革命説など突出して先鋭な主張を示したことで知られている。最初期の中国布教で有名なイエズス会士マテオ・リッチもその著『天主実義』で『孟子』について言及していた。またリッチののちには、同イエズス会士マルティノ・マルティ『中国史』（1658）においては、「四書五経」の概要が解説されるとともに、孟子の人間本性説について説明された。ただそこでは西欧にとって過激な言説は紹介されていなかった。つづいてルイ十四世の命を受けて中国哲学の本格的解説ならびに「四書」中の『大学』『中庸』『論語』のまとまったラテン語訳を提示したフィリップ・クプレらによる『中国の哲学者孔子』（1687）においてはなぜか『孟子』が訳し残されていた。公刊された本格的な『孟子』の全訳としては、やはりイエズス会士フランソワ・ノエルの『中華帝国の六古典』（1711）であった。上記イエズス会士は、単純に原文孟子を直訳したというわけではなく、彼らが訪れていた明～清代にかけての儒教の正統的解釈とみなされていた朱子学、ないしは宋学・宋明理学の解釈にのっとっていた。具体的には朱熹の『孟子集注』の首尾一貫して整合的な性即理説に立脚した注釈に依拠していた。さらにノエルは明代万暦期の大政治家で文教行政をも担った張居正の心の生動性を強調する『孟子直解』にも依拠して『孟子』解釈を行っていた。

時代は変わってフランス革命前後に勃興したシノロジーの代表者、スタニスラス・ジュリアンはイエズス会らによってもたらされた各時代の孟子注釈や、同会による先行翻訳を参考に、さらには清代の正統的解釈である満州語の『御制日講四書解義』をも参考にして、いわば三次元的・立体的なかたちで『孟子』翻訳を遂行した。

このようにジュリアンにまで至る孟子の翻訳・紹介はイエズス会宣教師によって先鞭がつけられたのであるが、その訳述がどのようなものであったのか、キリスト的に翻案されたものであったのか、それとも客観性を保持しようとしていたものなのか、場合によってはその先鋭な主張を強化するものであったのか、孟子原典、朱子集注、張居正直解、満州語訳等と各種欧語訳を比較対比し検討したい。

| 発表タイトル | 伊藤仁斎と『孟子』 |
|---|---|
| 発表者氏名 | 田尻　祐一郎 |
| 所属・職位 | 東海大学教授 |

伊藤仁斎（１６２７～１７０５）は、京都堀河の上層の商家の子で、朱子学を批判する独自の思想を築いた。仁斎は、『論語』と『孟子』の、朱子学によって歪曲される以前の本来の趣旨（「古義」）を復元させることに生涯を捧げた。主著は、『論語古義』と『孟子古義』で、他に『童子問』『語孟字義』などがある。

**１、『論語』と『孟子』**

仁斎は『論語』を「最上至極宇宙第一書」とし、『孟子』をその「義疏」と位置付ける。例えば「仁義礼智」とは何かというような原理的な説明は『論語』にはなく、『孟子』によって得られるのであり、そこで得られた定義によって『論語』を読むというのが仁斎の姿勢である。

**２、「四端」の「拡充」**

朱子は、「四端」の「端」を「緒」、「拡充」の「充」を「満」と捉えて、「四端」の発現を手掛かりに、糸口を手繰るように、心の内に潜む「性」の自覚に到達すべきだと論じた。仁斎は、「端」を「本」、「充」を「大」として、「四端」の発現を押し広げて、より大きな道徳としての「仁義礼智」にまで達するように努めることだと主張した。

また「性」について、仁斎はそれを各人生来の個性とする。人間はどこまでも個性的な存在であって、親子・兄弟であってもぴったりと重なるものではない。では、互いにバラバラかといえば、そうではない。朱子学であれば、人間同士が分かり合え共感し合えるのは、万人にぴったり同じ「理」が天から賦与されているからだろう。そういう「理」の思想を「残忍刻薄」だとして否定する仁斎は、ぴったりと重なるものではない人間同士の共感の根拠を「四端」に求めようとする。

**３、他者感覚と寛容**

仁斎も「孝悌」が人倫の基礎であることは認めるが、親子・兄弟の愛情の波及として人倫を考えるのではなく、「惻隠の心」の拡大としての「愛」が、現実生活においては親子・兄弟の間で真っ先に発揮されるものと捉える。また、「忠恕」の「恕」についても、朱子学では、「理」に沿って行動すれば相手も納得してくれると考えるが、仁斎は、相手の立場・思考法・感情などを忖度するのが「恕」だとする。こういう他者感覚が仁斎の思想の中心にはあり、そこから仁斎は（江戸の思想史には他に例がないほど）他者への「寛容」の意義を強調した。

**４、政治と他者感覚**

仁斎は、為政者に対して他者感覚を持つ必要性を説いた。そこには、民を教化の対象とだけ見るのではない、より洗練された社会認識があった。

以上

# 第 2 日
# 「近代漢学と孟子」

開会挨拶 牧角 悦子　　（二松学舎大学文学部長・教授）
趣旨説明 町 泉寿郎　　（二松学舎大学 SRF 研究代表者・教授）
１. 桐原 健真　　（金城学院大学教授）
「孟子の幕末」
２. 田中 正樹　　（二松学舎大学 SRF 事業推進担当者・教授）
「山田方谷・三島中洲にみる近代の陽明学と孟子」
３. エディ・デュフルモン　（ボルドー・モンテーニュ大学准教授）
「孟子、カントとアレクサンダー・ベイン、
中江兆民の自由哲学について」
～休憩～
４.中島 隆博　　（東京大学教授）
「フランスシノロジーが読む孟子」
５. 木村 淳　　（大妻女子大学非常勤講師）
「明治・大正期の『孟子』教材」
総合討論 コメンテーター : ジェレミー・ウッド　　（SRF 研究員）

| 発表タイトル | 孟子の幕末 |
| --- | --- |
| 発表者氏名 | 桐原 健真 |
| 所属・職位 | 金城学院大学教授 |

『孟子』が「四書」の一つに数えられ、儒学における重要な経典とみなされていたことは言うまでもない。しかし他方で、この列島上においては、『孟子』のうちに易姓革命を認める教説があることをもって、これを忌避する傾向もまた存在した。もとより、『孟子』自体は古代には伝来しており、また近世日本の知識人たちもまた『孟子』を重視していたのであるから、そうした言説がはたしてどの程度、この列島の思想史に根ざしたものであったのかは検討の余地がある。

近世前期の儒者で、いわゆる古義学を確立した伊藤仁斎（1627-1705）が、「孟子の学は、孔門の大宗嫡派なり」（「孟子古義総論」、『孟子古義』1720 刊）と高く評価したように、近世日本の知識人は、『孟子』という書を、もっぱら倫理を説く理論書として受容していった。しかしながら、こうした読み方は近世後期、とりわけ幕末に至ると大きく変容していくこととなる。すなわちそれは、「〔楊時曰く〕孟子の一書は、只だ是れ人の心を正くせんことを要（もと）む。人に心を存し性を養ひ、其の放心を収むるを教ふ」（朱熹『孟子集注』「孟子序説」）といったような個人的な倫理（「正心・誠意」）のあり方を問うような『孟子』の読みから離れて、むしろ政治（「治国・平天下」）を論ずる書として『孟子』を読み込もうとするものであった。

こうした傾向の背景には、18 世紀後半にはじまる「朱子学リバイバル」とでもいうべき思想的潮流において、形而上性を後退させた朱子学理解があったことは確かである。しかしそれ以上に、「今は則ち〔世界〕各区に並立して、交ごも戦国と為れり」（会沢正志斎『新論』「形勢」1825）というような、地球規模の戦国時代が到来したという時代認識が、やはり戦国時代――もとよりそれは中国のそれであったが――を生きた思想家である孟子への強い関心を惹起したのであった。

本発表では、幕末における孟子の存在形態を、とりわけ尊王攘夷論との関係からみていくことで、志士たちが『孟子』をいかに受容したのかについて明らかにしていきたい。具体的には、「志士たちのバイブル」（源了圓）と呼ばれる会沢正志斎（1782-1863）の『新論』や、獄中に『孟子』を講じた吉田松陰（1830-1859）の『講孟余話』（1856 成）などを取り上げて、その孟子理解を検討するものである。

| 発表タイトル | 山田方谷・三島中洲にみる近代の陽明学と孟子 |
|---|---|
| 発表者氏名 | 田中 正樹 |
| 所属・職位 | 二松学舎大学教授 |

幕末から明治初の激動期に藩政という「治国」の実践に於いて活躍した陽明学者・山田方谷（1805-1877）は、自身の思想を著作という形ではほとんど残しておらず、唯一『孟子養気章或問図解』（以下『図解』）があるだけだと言われている。方谷の前言によれば、明治６年、岡山の閑谷学校に於いて学生の求めに応じて『孟子』「養気章（「公孫丑上」の「浩然の気」を論じた部分）」を講じたが、専ら王陽明の趣旨に従い、朱熹には従わなかったこと、聴講者がそれについて疑問を抱くことを恐れて図解を作ったこと、加えて図解の理解のために、養気の学の本源（万古自然の道＝孔子の教え）を極めその流れ（子思・孟子・王陽明）を明らかにする「或問」数条を作ったことが記されている。また、『図解』を出版した方谷晩年の弟子岡本巍は、その序（明治 16 年）で方谷の学問が独特な「気学」であることを指摘する。「気、理を生ずるなり。理、気を制するに非ざるなり」「〔宋〕学は理を以て主と為し、理は気を制して、理・気自づから判る。」「王子（陽明）出づるに及び、其の学独り気を以て主と為す」「王子の学は、良知より悟入すと雖も、蓋し其の本源は孟子の養気に出づるのみ」。つまり、方谷の依拠する陽明の学は「気学」であり、それは主として孟子の「浩然の気を養う」章に基づくとするのである。

しかし、実際に『図解』を読んでみると、数条の「或問」を読んだだけでは「図」の意味が十分汲み取れるとは言えない。それは、そもそも『図解』が方谷が行った「養気章」の講義を深く理解するに資するものだからである。幸いなことに、門人が記録した「孟子養気章講義」が残されてされており（『方谷全集』第１冊、『孟子養気章解説』日高有倫堂、両者の内容は増減あり）、この詳細に孟子養気章を解説している講義を参照して初めて、「図」の意味がより明確になる。従って、本報告では、方谷によれば「不動心」を題材に「知言」と「養（浩然）気」を述べているとされる「養気」章の解釈の内、方谷独特の解釈（例えば告子の「不得於心、勿求於気」「不得於言、勿求於心」等）について、適宜図を参照しつつ考えてみたい。

また、『図解』の後序（明治 34 年）は弟子の三島中洲の手になるものだが、その中で「水廬（岡本巍）は先師晩年の弟子なり。故にこれを伝ふ。而して余の未だ嘗て見ざる所なり。其の説専ら王子気中の条理を以て之を解し、朱（熹）説の空理牽強と自づから径庭あり」と述べている。晩年の方谷の学問に触れることのなかった中洲が、師と同様「気学」としての陽明学を奉じ、「理は気中の条理」を旨としながら、「気生理」等の主張に聊か違和感を覚えている節が見られる。そこで、中洲の「気」に関する見解についても『中洲文稿』に収録されている書簡（例えば南摩綱紀・岡本巍宛）を手掛かりに、若干触れてみたい。

| | |
|---|---|
| 発表タイトル | 孟子、カントとアレクサンダー・ベイン、<br>中江兆民の自由哲学について |
| 発表者氏名 | エディ・デュフルモン |
| 所属・職位 | ボルドー・モンテーニュ大学准教授 |

中江兆民は自由民権運動の指導的な知識人であり、『社会契約論』の翻訳をした「東洋のルーソー」というイメージによって有名であり、多くの研究に取り上げられた人物である。しかしながら、彼の翻訳作業は充分に焦点化されたとはいえない。実は兆民にはルーソーに限らず、彼が創設した翻訳雑誌『欧米政理叢談』と、完全に無視された、Etienne Vacherot, Jules Simon, Alfred Naquet, Jules Barni, Charles Renouvier または Alfred Fouillée というフランスの共和主義者の翻訳著書も存在している。

その新しい史料を分析すれば、兆民が単にルソーだけを導入したのではなく、むしろカントとルソーの読者であったフランスの共和主義者の思想を導入したことが明らかになる。しかも、それは哲学に対する兆民の関心が従来の指摘よりも深く、孟子などの儒教概念を利用した上で、翻訳を通じて「理義」を中心とした自分の哲学を表現しようとしたことも意味している。

兆民にとって、「理義」のもとで孟子とカントとルソーを結びつける可能性があった。その意味で、カントが人気を集めたとされる大正時代以前、兆民は早くもカントの先端的な導入者であったと言える。ただし、兆民におけるアレクサンダー・ベインの存在も証明できることで、兆民はフランスの共和主義だけではなく、イギリスの心理学も重視し、彼にとって孟子と結んだ無神論的な自由観の可能性があったのではないかと推定できる。

| 発表タイトル | フランスシノロジーが読む孟子 |
| --- | --- |
| 発表者氏名 | 中島 隆博 |
| 所属・職位 | 東京大学教授 |

フランスシノロジー（中国学）は実に幅広い問題系を示しており、それを一望することはとてもわたしにはできそうにもない。この報告はあくまでも、わたしがこれまでパーソナルな仕方で関わってきたフランスの中国学の研究者が、孟子を読解することを通じて、いかなる思想的な貢献をしようとしてきたのかを、みなさんと共有するためのものである。

孟子は実に豊かなテキストである。そして、その孟子をどう読むのかは、それぞれの読み手にとって、孟子の思想的な意義をどう定義するかに深く関わってきた。「孟子ルネッサンス」とでも呼ぶべき現象が宋代以後に生じ、仏教に対抗しようとする儒教にとって、孟子の諸概念の新しい読解は不可欠のピースとなったことは言うまでもない。また、近代においては、東アジアが直面したヨーロッパ的な学知との対峙において、孟子が再び参照され、日本での近代陽明学や中国での新儒家の議論の重要なピースとなったこともよく知られている。

では、フランスにおいてはどのようなアプローチがなされたのだろうか。ここで取り上げるのは、三人の中国学の研究者である。すなわち、アンヌ・チャン、フランソワ・ジュリアン、ジョエル・トラヴァールである。

チャンは、ヨーロッパ言語による中国思想の通史として質量ともに圧倒的な規模を誇る『中国思想史』の著者である。近年はビブリオテーク・シノワーズという叢書を精力的に出しているが、それは中国語とフランス語訳が見開きで並んでいるという形式のものである。ただ、孟子はまだ刊行されていないようである。ここでは、『中国思想史』における孟子の思想史的な読み方を紹介するが、思想史という長いスパンに孟子を置くことで、中国における孟子読解の歴史的な変遷が手に取るようにわかるようになっている。

ジュリアンは、ギリシア哲学の専門家でもあることからわかるように、あくまでも哲学として孟子を読解しようとする。したがって、チャンの孟子読解とはかなり対極的で、現代にも通じる哲学的な問題系を孟子に見ているのである。具体的には、『道徳を基礎づける』という本に示された、ヨーロッパの啓蒙の哲学者と孟子との対話を紹介したい。道徳という近代的な概念の周りで、孟子の「性善」という主張があらためて読解され、啓蒙の哲学者たちを揺さぶるのである。

トラヴァールは文化人類学者である。ここに取り上げた三人の中では、おそらくもっとも足繁く中国と日本に来たのではないかと思われる。残念ながら、２０１６年３月７日に逝去された。文化人類学の観点から中国思想を取り上げるものとしては、マイケル・ピュ

エットのように古代中国を「フィールド」にする研究者もいるが、トラヴァールはより「古典的な」文化人類学者で、近代そして現代の新儒家を「フィールド」にしていた。孟子は、現代新儒家がとりわけドイツ哲学と対峙する文脈で言及されたのである。そのため、トラヴァールの孟子へのアプローチは、ジュリアンのように（ジュリアンとはエコール・ノーマル・シュペリオールの同級生だったかと思われる）哲学的なものにはなっているのだが、同時に制度としての哲学に対する批判に基づいているために、哲学を超えたものへの目配りがなされている。

以上の三人のフランスの中国学者による孟子読解は、さまざまな特徴があるが、その中でもっとも重要だと思われることが一つある。それは、フランスシノロジーにおける孟子読解が、古典中国に孟子を閉じ込めていない、ということである。古典中国における立派な思想として孟子を読むというよりも、一種の同時代人として孟子を読解しているのである。言語も文化も異にする環境において、孟子を人類が共有すべき遺産として取り上げ、しかもそれを生きた遺産、あるいは未来の遺産として尊重しているように見えるのだ。こうした態度に刺激を受けることもまたあってもよいのではないだろうか。

| 発表タイトル | 明治・大正期の『孟子』教材 |
|---|---|
| 発表者氏名 | 木村 淳 |
| 所属・職位 | 大妻女子大学非常勤講師 |

『孟子』は明治・大正期における代表的な漢文教材の出典の一つであるが、複数の古典から抜粋した漢文教科書を見ると、明治 10 年代では採録率は 1 割に満たず、定番教材になるのは明治 30 年代以降のことである。本報告はこうした扱われ方の変化をもとに『孟子』教材が明治・大正期の漢文教育において果たした役割について考察を試みるものである。

明治 10 年代に『孟子』教材の採録率が低い理由には、この時期の文部省による教科書調査が社会秩序の安定を重視したことが挙げられる。採択教科書の適否を示した『調査済教科書表』（1880－1885）に記載された、使用不可の漢文教科書には共通して収録された教材がある。例えば殷周革命に関する記述を含む伯夷・叔斉を題材とした教材や、赤穂義士のような復讐を題材とした教材等が風紀を乱す不適切なものと判断されていたと考えられる。『孟子』は『調査済教科書表』に記載がないが、当時教科書調査に携わっていた人物の回顧録には、明治 14 年（1881）の政変により治安が乱れ、矯激な『孟子』は排斥されていたと述べられている。明治 10 年代の教科書調査では過激な表現を含む教科書は使用が認められず、そのため『孟子』もあまり採録されなかったと考えられる。

小学校での漢文教育が明治 19 年（1886）で終了したため、明治 20 年（1887）以降の中学校は漢文未習者への対応に迫られた。そして、20 年代末に漢文は国語の補助であると教則で定められたこともあり、明治 20 年代から 30 年代前半は中学校漢文科の目的や漢文教授法に関する議論が活発になった。そこで、漢文科は徳育に偏ることなく情育や知育にも注意を払うべきであるという見解も出された。漢文教科書編集の技法も進歩し、漢文科が他教科の語彙も学べる有意義な教科であることを主張するために幅広い分野の教材を揃えた教科書が流行した。教科書調査においても、明治 19 年（1886）に始まった教科書検定制度では、思想面の点検ではなく漢文学習に効果的であるかどうかに重点が置かれるようになった。このように漢文教授法・漢文教科書編集方法が進展を見せた時期において、『孟子』教材は模範的な文章であるばかりではなく、上級学校の入学試験にも頻繁に出題されるために採録数を伸ばした。

明治 30 年代後半、中学校漢文科は他教科の語彙を学ぶことではなく、道徳教育にこそ意義があるという風潮が生じた。そして明治 10 年代に不適切とされた伯夷・叔斉や赤穂義士を題材とした教材は、扱われ方が変わって義を重んじる模範的な人物を学ぶ作品となり、多くの教材が道徳教育という役割を担うことになった。

明治 40 年代には儒家の経典が「教育ニ関スル勅語」の注釈であると見なされ、明治 23 年（1890）の渙発当時よりも教育勅語が漢文教育・漢文教科書編集に対する影響力を強めたことで、『孟子』教材の徳育に資する役割がさらに高まり、大正期にも継承されたのである。

MEMO

MEMO